

# 明末日本僑寓シナ貿易商

## 一官アウグスチン李国助の活動

——「明末日本僑寓支那甲必丹李且考」補考——

はじめに

岩 生 成 一

一 序 言

曾て東洋学報に「明末日本僑寓支那人甲必丹李且考」と題して一文を載<sup>(1)</sup>せ、十七世紀の初め頃平戸に在住して、同地を根拠地として活動し、殊に台湾を中心として東南アジア各地にも頻りに商船を派遣して貿易を営み、又当時平戸に商館を設けていたイギリス、オランダ両国人とも深い交渉を持ち、更にオランダ人が澎湖島を撤去して台湾に根拠地を築くに当り、中国官憲との間に仲介斡旋した中国人の有力者 Andrea Ditis 李且の全貌と、彼の死後その勢力を継承して活動するようになった配下の鄭芝竜との関係についても、聊か論述紹介したことがある。その後二十余年にして、一九五八年に、東洋文庫の *Memoirs, No. 17* に、前稿に若干の史料を追加した英訳を載

明末日本僑寓シナ貿易商アウグスチンの活動

岩 生

第六十六卷

六三

せたが、更にその後二十余年経過する間に、内外の史料が若干存在するのに気がついたので、これ等を加えて前稿を補足し、前稿では尚尽し得なかつた李旦の長男一官アウグスチンの活動についても触れて見たい。

## 二 李旦宛ての二書翰

平戸のイギリス商館長として、終始李旦と深い交渉を持ったリチャード・コックスの日記は、一六一五年六月一日から書き始めてあるので、その以前商館開設の一六一三年六月以降二ヶ年の間は空白であり、又この間館長コックスを始め商館員等の往復した書翰は七〇通許りの多きに上っているが、李旦の消息を伝えたものは僅に二通<sup>(3)</sup>で、共にその中に李旦とその新妻との不仲を報じた記事があるに過ぎない。唯、強いて言えばその一通一六一四年二月五日に平戸から館長コックスが、江戸方面滞在中の館員リチャード・ウィックカム(Richard Wickham)にこのことを報らせているので、彼と李旦との間柄を多少知り得る位である。

所が商館開設後一年足らずの一六一四年五月二十五日に、当のウィックカムが、江戸から平戸のシナ・カピタンに宛てたポルトガル文の一通がある。即ちこれを訳載すれば、

カピタン・アンドレア殿

好い機会があつたので、ここに一書を貴殿に呈するのは、私の大変欣快とする所であります。しか只今までの所、キャプテン・アダムスを通じて、私の願望することは、そんなに十分には充たすことができませんでした。彼は、私が貴殿から常々受けている多大な恩恵と親切とを、衷心から如何にも多く認めているかと告

げることができません。何れにしても、私は貴殿に感謝致すことができます。しかし少くとも、京(Meaco)から、同地において、これまで私のために示された多くの事柄について、私は謝意を現わす好機会が来るまで、酒二樽を贈りますから、受納され度し。神よ永年にわたり、貴殿を護り結わんことを。

江戸における私の宿において。

主の年一六一四年

貴殿の従順なる下僕

アール・ダブリュー

わが主の永年にわたり護り給う

キャプテン・アンドレア殿

平戸においてキャプテン・

アダムスに託す<sup>(4)</sup>

この書翰の差出人ウィツカムは、平戸のイギリス商館の次席館員で、対日国交貿易開始の使命を帯びて来朝したジョン・セーリスに従って、コックス等と共に来日し、爾来一六一八年三月に日本を退去するまで、江戸、駿府、京坂の間に往来し、これ等各地のイギリス商館出張所の責任者として活動したが、偶々江戸滞在中、五月二十五日に平戸にいる李且にアダムスに託して送った書翰である。李且は来日前マニラで永年暮したので、ウィツカムはこの点を念頭において、その理解し易いように、拙くはあるが特にポルトガル文でしたためたのではない

かと思われる。そしてこの書翰の発信地が、江戸におけるウィツカムの宿と記してあるが、翌一六一五年十月二十九日にアダムスが駿府から江戸に滞在中のウィツカムに宛てた書翰の包紙に、和文で「江戸にて安針やとへ御届候」とあり、その横に英文で「This deliver in Eddo in the street called woodwarachyo yokochors」<sup>(5)</sup>、即ち本書を小田原町横丁にあるアダムスの宅に届けられたとあるので、彼が後年になって按針町と命名された小田原町の横丁にあったアダムスの住宅に宿泊していたに違いない。因に包紙の文言は、内外の文献中江戸におけるアダムスの住宅の所在地を明記した初見である。本書翰を通じて、李旦とウィツカムやアダムス等三者の關係がおぼろげに判り、殊にウィツカムが、日頃から李旦の「恩恵と親切」を大いに受けていたことを記してはいるが、その具体的な実情は明らかでない。

李旦に対する第二の書翰は、その後四年許り経った一六一八年一月二十七日付で、平戸から商館長コックスが長崎滞在中の李旦に宛てて日本文でしたためたもので、ブリチツシュ図書館所属のインド庁文庫 (India Office Library) に保存されているが、既に遙か往年村上直次郎博士が『史学雑誌』第十四卷の附録に「ロンドンの日本古文書」と題する紹介文の中でもこれを挙げて、詳しい註を加えていられる。<sup>(6)</sup> まず一応その全文を掲載すれば、

尚々此ふね

爰元逗留仕候は、

たうしん二人長崎下

書状を以て申入候。仍

候を、のせ申候。

植木四本、参候。

余人にのり手を

則うへ申候。付候は、

尋申候間、就夫

うれしく可存候。

とう里申候、右之

次に安仁殿昨日御下候て

外、用も無之候。

御朱印之事、跡(後)より

以上

安仁若者持下候間、此

一兩日に可参と存候。

我等長崎 下申度候。

頓而正月にて候間、きさまを

待申候。はうさまへも

明末日本僑寓シナ貿易商アウグスチンの活動

岩生

書状を以申度候へ共、  
かひたん殿御前より  
御ころ頼申候。

一あかかね千五十斤、きさま内

新右衛門殿渡申候。重而

入用之時又々頼申候。

一植木持来ふねに、舟

ちんに貳十匆渡申候。

きさま家子共たち、御

内かたさま、何も御盛敷、

毎々きさま待申

る、ことに候。恐々謹言。

(元和四年)

ゑげれす・かひたん

十二月廿二日　　るいちやる・かくす

ちいな

ゑけれす

かひた<sup>(?)</sup>

かひたん

この書翰については村上博士の註解によれば、日付が単に十二月廿二日とあるだけで、その年次を記していないが、その余白に英文で 1618, Copie sent to Andrea Dritis, from Firando to Langasague le 27th January とあるので、彼我の暦日に一日の差があっても、元和四年十二月廿二日に商館長コックスが、長崎滞在中のシナ・カピタン李旦に送った書翰のコピーであることが判る。現にコックスの日記一六一八年一月二十六日の条に、

予はシナ・カピタン・アンドレア・ディツチスに、安全証書、即ち海洋において総てのイギリス船、又はその他イギリス皇帝陛下の味方に対する特惠の書面四通を与えたが、一通は交趾シナの東京<sup>トキウ</sup>に向うジャンク船一隻と、他の三通はタカサンゴ<sup>(高砂)</sup>又はビスカドレー<sup>(澎湖島)</sup>スと呼ぶ台湾島に航するジャンク船三隻に対するものである。<sup>(8)</sup>

とあって、館長コックスは李旦の台湾や東京に向う商船に航海の安全を保証する証書を与えたが、当時日本から南方に渡航する朱印船は、幕府の朱印状の外に、途中の航海の安全を保証するため、このように平戸のイギリスやオランダ商館の与えた航海安全保証書や手紙や、さらには両国の国旗までも携行した。所で前掲書翰の中には「次に安仁殿昨日御下候て」「御朱印之事、跡より安仁若者持下候間、此一両日に可参と存候」とあって、安仁即ち三浦按針アダムスが昨日江戸から平戸に着いたが、海外渡航朱印状の方は、その後からアダムスの若者が携帯して下って来るので、一両日中には着くであろうと述べているのは、恐らく東京に向ふ李旦のジャンク船の朱印

状と思われる。かねて幕閣に顔がきいたアダムスが、彼の朱印状についても何等か斡旋の勞を取ったことが判る。次に「あかかね千五十斤、きさま内新右衛門殿渡申候。重而入用之時又々頼申候」とあるが、江戸時代を通じて銅は主要の輸出品であり、イギリス商館も李旦を介してその入手を計っている。この外はう即ち李旦の弟で朱印船貿易商華字や、李旦の家子達や御内かた様など、彼の家族ぐるみ昵懇にしていることも判る。

### 三 李旦の長子アウグスチンの前半生

李旦の家族構成とその長子アウグスチンについても、既に一寸触れたが、館長コックスは商館の貿易推進運営上、常に李旦とは事務的な交渉を持ち、屢々相互に援助し合い、その関係からも、日頃からその家族ぐるみ親しい交誼を重ね、贈物をする際にも、大抵その子アウグスチンとその一家にも及ぼしている。例えば、彼の日記一六一九年一月九日の条によれば、コックスが江戸参府旅行から平戸に帰ると、直ちに藩の重臣達や館員等に夫々贈物をしたが、この際李旦一家にも贈物することを忘れなかった。即ち、

予は次のように贈物をした。即ち

シナ甲必丹アンドレア・ディツクスに  
諸白二樽と鮭二尾並びに皇帝(符璽)が予に下賜された絹の着物二着

彼の息子アウグスチンに、同様に他の絹の着物一着

又シナ甲必丹の妻に絹地の帯一筋、もろはく足袋一足と紐、並びに勾つき扇子一面を甲必丹シナの妻(10)に

とあるが、翌々一六二二年六月二十二日の条には、コックスが長崎から平戸に帰った時に、

予は長崎に向け□通の書翰を送った。

一通は長崎にいるシナ甲必丹の妻にあて、諸白四樽を送った次第を記した。即ち二樽は彼女自身あて、一樽はアウグスチンの妻あてで、一樽は彼女の父忠五郎殿 (Chungro Dono) あてであって、これ等の書翰と瓶詰の強い酒類は、総てアンドレア・ディツチス・シナ甲必丹を通して送った。<sup>(11)</sup>

とあって、ここにアウグスチンの妻は長崎に居て、その父は忠五郎とあるから、彼女はこの父を親とする日本女次平蔵等の要人に挨拶して贈物を呈し、幕府との貿易要務などや、広く情報を蒐集して、滞在十日にして平戸に立つに当り、更に李旦の家族にも贈物をしたようで、日記の八月二十六日の条に、

われわれは今朝平戸に向って出発したが、支払は、

われわれの当地滞在中の食費 二七両 八分

部屋代としておかみさんに 小粒銀 四三

召使達に 小粒銀 三二五

贈物の反物類

甲必丹ホウの息子に 黒地縞物琥珀織 一反

シナ甲必丹の娘に 全じく 一反

明末日本僑寓シナ貿易商アウグスチンの活動 岩生

アウグスチンの息子に 全じく一反<sup>(12)</sup>。

とあって、ここにアウグスチンの息子とあるのは、前述の日本人妻との間に儲けた子に違いない。又甲必丹ホウとあるのは、元和四年十二月二十二日（二六一八年）にコックスが李旦に宛てた日本文の書翰の中で、挨拶の伝言を書き添えた「はうさま」と同一人に違いなく、彼は李旦の弟で、兄と共に朱印船貿易に活動しているが、一六二〇年一月頃に死亡したので、その死後においても息子に贈物をしたわけである。

所で一六二一年二月十日は旧暦の正月元日に当たっているので、その祝として、コックスは李旦に奉行長谷川権六から貰った絹の着物や、その娘兩人にも夫々贈物をしたが、その日の日記によれば、さらに、

尚さらに予は彼の親戚二官（Niquan）に次のような贈物として、権六が予に贈った絹の着物一着を与えた。

これ等の贈物は、シナとの交易を獲得することを望んで親交を深めんためであって、二官はこの件に従事させられて<sup>(14)</sup>いる。

とあるが、コックスはかねてからシナ貿易の開拓を熱望して、頻りに李旦に働きかけて、この件に彼の親戚の一人二官が関与させられていた。この二官は本国シナや交趾、東京など各地にも渡航して貿易を行っていたが、その後一ヶ月経って、三月十日に李旦と息子のアウグスチンとから夫々一通の書翰を受取り、彼が息子とこの二官とを持船で派遣する意向であることを知った。<sup>(16)</sup>そして七月三日になって、アウグスチンは長崎からコックスに一書を寄越して、台湾から帰着したことを父李旦に報じた旨を伝えて来たが、これによって、彼が父の主なる貿易の地盤台湾に航して働いたことも判る。恐らく彼は此のようにして、父の派船した各地に、あるいは父に代って

渡航したり、あるいは父に随行渡航して活動し、二官も李旦一門の貿易活動の一翼を担っていたのでは無いかと思われる。

尚ここに彼等父子の特異な行動として、日本キリシタン史上最大にして著名な元和の大殉教の契機となった宣教師の潜入事件に関り合うようになったことがある。

一六二〇年六月四日頃、マニラを出帆して帰航の途にあった日本船が、台湾近海で、哨戒中の蘭英連合船団の一船イギリス船エリザベスに誰何拿捕され、連行されて八月四日に平戸港に入港した。くだんの日本船に外人宣教師二人が潜伏していると睨んだ上のことであった。早速平戸藩に、ついで長崎奉行所に通ぜられて取調べにかかった。屢々証人等も喚問されて略々アウグスチン会のペドロ・デ・ズニング (Pedro de Zuniga) とドミニコ会のルイス・フロレス (Luis Flores) とは判明したが、両人は頑強に沈黙を守って、取調べは一向進捗せず、在再一ヶ年余に及んでも決着しなかった。そこで同方面にもかねて渡航貿易していた李旦とアウグスチン親子も呼び出された。コックスの日記一六二二年十一月八日の条に、

そこでシナ甲必丹の予に語るところによれば、平戸の王は秘かに彼の許に使を寄越して、このペドロ・デ・スネガ (Pedro de Suneга) が伴天連であるか否か知っているかを彼に訊ねた。これに対して彼はその者が伴天連であることを承知して居り、彼の息子アウグスチンもマニラに居たので同じく承知しているが、しかし彼は長崎に住んでいて、<sup>(長谷川)</sup>権六殿が彼の友人であるので、自分はこの事件に関与するのを望まないと答えた由である。<sup>(18)</sup>

平戸藩と奉行長谷川権六との間には、取調べの態度に幾分か相違があり、世上では奉行が信徒であると言う噂も流れている程で、あるいはアウグスチンにその辺の所で、何か気兼でもあったのでは無いかと思われる。何れにしても、取調べは依然として難行し、二人の宣教師がやっと自白して最後の裁断は下され、一六二二年八月十九日に宣教師二名と船長平山常陳デイエス (Joachim Dies) 並びに日本人船員等が先づ長崎で処刑され、続いて、九月に入り男女小児に到るまで多数処刑されて、いわゆる元和の大殉教が起った。コックスは、早速この詳細を、同年九月七日と十一月十四日に、ロンドンの東インド会社総裁トーマス・スミス卿 (Thomas Smyth) に報じたが、同書の末尾に、さらに

今亦遅くシナのジャンク船一隻が薩摩に着港し、マニラ島のカガリオン (Cagarrion) から来航して船客として、イスパニア人か、あるいはポルトガル人かを四名乗せて来たが、宣教師と判明して囚人として長崎に送られ、前例のように死刑に処せられると思われている。この船は総てシナ甲必丹アンドレア・ティッチス(わかれの友人)のもので、若し出来るならば、彼の貨物を救うために、先づ彼の息子に多大な贈物を持たせて宮廷に遣わさんとしている。<sup>(20)</sup>

とあり、ここで亦もや宣教師の潜入に係わることとなったようである。常陳の場合には、宣教師、船員諸共に処刑され、船荷は幕府に没収されたが、この前轍を踏まぬように、幕閣に働きかけるために父から派遣された息子とは、もとよりアウグスチンより他にはあり得ない。しかしイギリス商館は翌々一六二四年一月早々に閉館して日本から退去して、爾後その消息を伝えず、李且もその翌一六二五年八月には天寿を全うしたようであるから、<sup>(21)</sup>

呂宋島から薩摩に帰着した彼の船に関する問題は、一応解決したと思わざるを得ない。

#### 四 一官アウグスチンと鄭芝竜との抗争

李旦死亡の時、その良い協力者として活動していた息子の一官アウグスチンは、もう可なりの年配であったと思われる。当時李旦は経済的に可なり不如意であったが、彼は兎に角父の活動の基盤や勢力を受け継いだ。所が、曾ては父の有力な配下であった一官鄭芝竜も、その頃李旦の下を去り、台湾福建方面の海上で活動するようになり、ここに必然的に両者の間に確執抗争が起った。

李旦の死後芝竜が配下の衆に推されて、その頭目となったことは『明史紀事本末』などの関係諸書に、極めて伝説的な物語として伝えられているが、その真偽は別として、その後幾許もなくして海賊の巨魁として配下の海賊を率いて、福建や広東から時には浙江の沿岸海域にわたり頻りに劫掠殺戮を事としたので、その討伐に手を焼いた明の地方官憲は、その招撫に乗出し、漸く崇禎元年九月（一六二七）になって、工作は功を奏して、芝竜は終に明の軍門に降り、明は彼に軍職を授け、その兵力に頼って多くの海賊を討伐したが、中でも崇禎二年正月（一六二九）の李芝奇と同八年四月（一六三五）の劉香老は、その雄なる者で、後者については、『皇明実録』<sup>(23)</sup>にも「丁亥福建游擊鄭芝竜合粵兵、擊劉香於田尾遠洋。香脅兵備道洪雲蒸、出船止兵。雲蒸大呼曰、我矢死報國、亟擊毋失、遂遇害。香勢聲自焚溺死。」と記している。

このように李旦死後の芝竜の活動については諸書に色々伝えているが、他方一官アウグスチンについては全く

伝える所が無いようである。しかし父李旦や彼と深い交渉があった台湾のオランダ側には、その間の消息を伝えた重要な文書も若干あつて、既にその一部を紹介したこともあるが、その一に、台湾長官ハンス・プットマンズ (Hans Putmans) が一六三三年八月二十九日 (崇禎六年) に彼から受取つた書翰と、他は同年九月十四日に受取つたもので、何れも極めて長文であるが、後者をここに抄訳すれば、

先立つて閣下の書翰を受取り深謝の至りであるが、これによつて一官 (Jan) 「鄭芝竜」に対する閣下と私の意見が同じ立場にあることが判つたので、再度御返事致す次第である。故ソング長官閣下の時に、私の父は大いに骨折つて、オランダ人が、(澎湖島) フーから台湾に城塞を確保するのを援助して、シナから来る商人が皆その利益を得る道を開いた。その頃一官は会社の通訳を勤めていたが、狡猾にも私の父の意に背いて、同地に來る商人等から金を掻集め、財宝を総て自ら独占して大いに尊敬されるように努めたが、少しも成功しなかつたので、盜賊に身を落した。そのために私の父の富の大部分やシナの大官に献上する贈物、並びに一官に対する信用も全く消え失せた。そして私は幾度かそのことを思つて落胆限りなく、終に多数のジャンク船を集め、兵備を整えて、前記の一官と戦い、彼のジャンク船を焼き払い、彼を殺害せんと決心した。ここにおいて、私の手兵等もこれを諒承して、近々立上つて私の意向を実現せんと誓つた。

私はあらゆる方面から、彼の弟デイシア (Dissia) が彼を引止めんとしたが、これを達することが出来なくて、そのジャンク船を唯海域に停めているに過ぎないことを伝聞した。そこで一官はその右腕で唯一の頼りになるものを失つて、彼の勇氣も大變失われて、多くの人々から俄かに嫌われ見離されるようになるであらう。

私共は又当地で一官が福州と漳州の河に、多数のジャンク船を集めていることを知った。

と述べ、一官鄭芝竜が李旦の下を去って海賊に身を落し、配下に多数のジャンク船を擁していることを強く誹謗しているのは、彼と対抗している一官アウグスチンとしては、極めて有り得る態度言動であるが、彼は更に引續いて、

そこで私共は又私共の友サプシシア (Salsacia) を閣下の下に早急に派遣して、万事にわたり商議せしめ、一官の勢力を撃つて壊滅せんと欲するが、何卒閣下も信頼される人物を派遣されて、閣下の意向を一切伝えられ度く、そうすれば、閣下と私共の間に、前述の計画が達成されるまで、支持と援助が行われるであらう。

と述べて、協力して一官芝竜を討滅せんことを提案し、この書翰の末尾に自らコクソウ (Cocksow) と署名している。<sup>(25)</sup> このコクソウはアウグスチンのシナ名に違いない。即ち、姓は李で名はコクソウであったと思われる。これに対して、長官ブットマンズは、対岸廈門近海に出動中のオランダ艦船カットワイク (Catswick) から、早速同年九月十九日付の返書を彼に送ったが、その中で、

一官は屢々火船や兵船を以て漳州河で我々を圧倒せんと企てたが、何時も大なる損害と恥辱を受けて遁走せねばならなかった。我々は我々の全勢力を挙げて北航する意向であるが、同時に我々は貴殿にこの書を送り、更に貴殿が敵に対して完全なる勝利を得られんことを希望する旨を口頭でも述べるものである。<sup>(26)</sup>

と述べて、既に芝竜と交戦しているが、更にその提案に応じ、アウグスチンの勝利をも希望している。現に平戸オランダ商館の日記の同月十五日の条に

最後にヤハト船フェンロー号の検査の際、船員の箱若干から発見された八四二リアル八分の一は、彼等が、一部バタバアから持って来ており、残りはシナ沿岸アモイ附近で、一官の戦争用ジャンク船を押収した際、火事の中から運び出した、と言っている。<sup>(27)</sup>

とあって、矢張厦門近海でオランダ側と芝竜の兵船との間に抗争があったことを伝えているが、更に二ヶ月経つて、日記の十一月十七日の条に

シナ沿岸では、長官プットマンズにより、この国に対する戦争が懸命に進められている。彼は下級商務員故ザールを、去る七月二十七日海賊アウグスチン、ヤングロウ (Yang Lau) の許に派遣した。アウデワーター号がシナ沿岸から出発する二、三日前に、ジャンク船五隻とこの海賊の代表数人が、長官プットマンズの所へ来た。彼等は長官と共にシナに対して戦いを始めることに非常に乗気であることを明らかにし、彼等の兵力で我々と協力しよう、と言った。神がこの戦争により、東インド会社に長い間希望されていた自由貿易を与え給う様に。<sup>(28)</sup>

と記してあって、オランダ側では、武力に訴えてもシナとの自由貿易を獲得せんと望み、早くから海賊アウグスチンや同じくヤングロウと接触交渉し三者協力して、言わばその共同の敵芝竜に戦いを開かんとしいる。そしてここに交渉の相手に挙げられた海賊アウグスチンとヤングロウの許に使節を派遣して、彼等の代表と協議しているが、この海賊アウグスチンとあるのは、李旦の長子一官アウグスチンのことで、先に指摘した一六三三年八月二十九日に受取ったアウグスチンの書翰の表題にも「長官プットマンズ宛ての盜賊アウグスチンの書翰」と記さ

れていて、平戸や台湾のオランダ関係筋では、彼のことをこのように呼んだものと思われる。あるいはこの時代シナの海商の中には、居常貿易を業とし、時には海賊に变身して、その財力や勢力の拡大を計っていた者もあつたのではあるまいか。尚ここに注目すべきことは、オランダ側が、アウグスチンと共に、海賊ヤングロウなる人物と接触交渉していることである。

## 五 海賊劉香老とアウグスチン李国助

これより先、崇禎元年九月（一六二八年）鄭芝竜が明の軍門に降り、その命を受けて屢々海賊の討伐に各地に出動したことは、中国側の諸文献に散見する所であるが、その雄なるもの劉香老についても、手近な明史紀事本末にあるところを拾つて見れば、

（崇禎）五年冬十一月海盜劉香老犯福建小埕、遊擊鄭芝龍擊走之。

六年夏六月、海盜劉香老犯長樂。

七年夏四月海盜劉香老犯海豐。

八年夏四月福建遊擊鄭芝竜合粵兵、擊劉香老于田尾遠洋、香老脅兵備道洪雲蒸出船止兵、雲蒸大呼曰我矢死  
國亟擊勿失、遂遇害。香老勢蹙自焚溺死。八月香老家屬六十余人、部属千余人至黃華、降于温處參軍。<sup>(29)</sup>

とあつて、丁度一官アウグスチンが台湾のオランダ側と協力して芝竜に抗戦撃破せんと計画している頃、芝竜は劉香老の討伐に随時出動して、その後終に一六三五年の初夏にこれを撃滅しているが、オランダ側でもこの点に

ついで強い関心を抱き、その消息を伝えている。即ち『バタビア城日誌』一六三二年七月十五日の項に、

海賊ヤン・グラウ (Jan Glaau) が、大小ジャンク船百艘を率いて漳州の川に碇泊して、曾つて海賊等の行ったこともないあらゆる破壊を敢行したことを聞いた。<sup>(30)</sup>

と記し、さらにその一六三三年二月七日 (崇禎六年) の条には、

一官は海賊ヤン・グラウと福州の川の附近で戦い、ヤン・グラウの配下二千人を殺害し、彼を南方に逐いやつたとのことである。<sup>(31)</sup>

と記してあるが、『平戸オランダ商館の日記』同年六月二十六―二十八日の条には、

今日タイワンから長崎にジャンク船が到着したと聞き、次のことを知った。海賊ヤングロウはゼーランディア城を攻撃したが成功せず約四、五十人を失い、堯港に上陸した。ここを警備するため、オランダ人二人が長官から派遣されたが、草むらに隠れていた数人に殺された。しかしこれについては、くわしくは聞けず、また確実でない。<sup>(32)</sup>

とも記してある。ここにヤングラウとあるのは、固よりシナ側の文献に屢々見える前述の劉香老に比定されるが、何れもシナの記録の欠を補うものである。

此のようにして、海賊劉香老と鄭芝竜とは、相並んで明末以降の諸文献に記されているが、ここに明末福建の文人として聞えた董応挙の書き残した逸文「籌海剩言序」五四九字は、彼等の動向にも触れた、他書に見られない文である。董には、その字崇相に因んだ文集『崇相集』が明末に刊行されていて、明末万曆、天啓、崇禎間の

海防、涉外關係の重要かつユニークな文も多く収録してあり、一は葉高向、呂純如の敘序のある十卷本で、他は葉高向、董可威、呂純如、何如龍等の叙序のある十七卷本であるが、さらに先年『崇相集選録』が台湾文献双刊第二三七種として出版された。そしてこの「籌海刺言序」は、その十七卷本第五冊に収録されている。<sup>(33)</sup>序文の内容は大約三部に分れ、その一は刺言なる書の書名の由来、その二は刺言の取扱った閩粵の海防、海賊討伐の具体的実情に触れ、その三は、序文の筆者董應挙の、著者に対する希望と感想を綴ったものようである。即ち第一の書名については、

雲林徐公籌粵籌閩奏記、於中丞公旁商同事、下以教戒將吏之言也。其間料軍實、揣情形、察地險、……何以云刺、其出於公牘羽檄之外、又為此言也。夫閩粵之海、汪洋万里、于彼于此瞬息莫知所之。賊之為謀、一日百變。公牘所騰、羽檄所下、不可而明言也。即言之亦不能盡、不得不託於書。蓋其計深、其慮密。故其言不得不盡、以刺而成密、以言而借筋、此古豪傑謀國之深心。

と述べてあるが、この刺言の筆者雲林の徐公とあるのは、明末福建巡撫にも任ぜられた徐学聚ではあるまいかと思われる。彼はその職掌柄同方面の事情にも精通していて、「初報紅毛番疏、紅毛通市」や「報取回呂宋囚商疏、撫處呂宋」のような疏も書いている。<sup>(34)</sup>序によれば先づ劈頭「籌粵籌閩奏記」なる六文字を以て、同書の内容を端的に表現し、同方面の海防の重大なことを力説し、將吏にその注意を喚起し、心構えを説いて対策に及んでいる。第二の段節では海盜劉香擊破の次第を述べ、

今親公之謀粵、首事於澳夷猝應於劉香、經營收拾於內海之盜、固已功見言信矣。転而籌閩正當香賊之坡猖、

以粵之道將為質、乘便以肆毒於閩。公密與中丞公計、專任鄭將、招李國助、而携其交呼吸而破之於田尾洋。元凶援首、醜類北遁、又破之於竿頭。……又以國助番哨不可測、密計而除其患。而後海氣屏息、南北之商旅流通、粵粟南來、閩中庚癸不呼、禍亂不起、皆公剩言之所造也。

と記して、海賊劉香を田尾洋に撃破した経緯を述べている。そしてこの撃破は崇禎八年四月（一六三五年）のことであるから、この剩言の成るは、少くともこの年以降にかかり、アウグスチン・コクソウが長官ブットマンスに、協力して芝竜を攻撃せんと提案した一六三三年八月より二年足らずの頃である。その頃、明の海防当局は、永年暴威を振って手こずって来た劉香老の討伐に、計をめぐらして「專任鄭將、招李國助、而携其交呼吸、而破之於田尾洋」とあるように、既に明の遊撃として、当然その討伐に努めていた芝竜をこれに差向け、李國助なる人物を起用して、協力して以て劉香老を田尾洋に撃破したのであった。しかし管見の限り、この序文以外にシナ側の諸文献に、李國助なる人物の載ったものを知らない。これはまさしく、この頃台湾や対岸方面において活動していたコクソウと同一人物に違いない。即ちこの比定に誤りなしとすれば、一官アウグスチン・コクソウこそ、父李旦の姓を受け継いで、その姓は李、その名は、発音も近似している、この國助であったに違いない。しかし彼が、前述のように、個人的な事情や感情から、芝竜と対抗していたにも係らず、福建の海防当局から、それを差し措いて、当面の問題である劉香老の討伐に参加協力せしめられたと見ねばならぬ。

李國助のその後の活動や運命については、明らかでないが、序文の中に「又以國助番哨不可測、密計而除其患」とあるように、当局からその行動や態度を疑われて斥けられたに違いない。さらに平戸オランダ商館の日記によ

れば、この討伐と同年一六三五年十月十二、十三日の条に、

今年八日処刑されるために、十三人が門前を通り送られて行った。中にポルトガル人が一人いた。彼等は昨年手紙を持って来たため捕えられ、彼が手紙を渡した男、その妻、五人のカトリック教徒——二人は女——三人は男——と共に火あぶりにされた。他の人々、即日本人二人とシナ人三人——この中にはシナ沿岸の海賊アウグスチンの息子もいた——は十字架にかけられた。<sup>(35)</sup>

と記され、アウグスチン李国助の息子が十字架の極刑に処せられたことを伝えているが、それから四年経って、日記の一六三九年十月二十日の条にも、

即ち妻子と家をここに持ち、ここに住んでいるシナ人は、この国から出帆することを許されない。我々は彼等がシナ人の常で、必ずや海賊行為をするであろうと思われる為めである。第二の一官の息子の様に、その父が海賊だったため、又父の盗みのため、日本で死刑になっている。<sup>(36)</sup>

と記され、息子の死刑の理由に、父の盗賊行為があったことが取沙汰されていた。して見れば、父李国助が、再び日本に帰住することは思いも寄らず、既にシナ当局からも斥けられていた程であるから、その後落ち行く彼の運命の末は想像にかたくない所である。

#### 註

- (1) 『東洋学報』第二十三卷第三号。三七九—四三五頁。
- (2) *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No. 17, 1958, pp. 27-83.
- (3) *Richard Cocks at Firando to Richard Wickham at Edo or elsewhere*, 5th Feb. 1614. (O.C., No. 130)

- William Eaton at Osaca to Richard Wickham at Edo, 1st March 1614. [O.C., No. 133]
- (4) Richard Wickham at Edo to Andrea Dittis at Firando, 25 May 1614. [Factory Records, China and Japan, 15]
- (5) William Adams to Richard Wickham at Yedo. In Sourangawa, 29th of October 1615. [O.C., No. 307]
- (9) 村上直次郎「ロンドン日本古文書」『史学雑誌』第十四卷第九、十一号附録。
- (7) Copy of letter sent by Richard Cocks at Firando to Andrea Dittis at Langasque, 27th January 1618. (元和四年十一月廿二日) [O.C., No. 739]
- (8) Richard Cocks: *Diary kept by the Head of the English Factory in Japan*, Vol. I. Tokyo, 1979. p. 241. 村上博士は註の中で「本書翰の年代のロックスの日記が欠けているから、当時の事情は詳しく知ることができない」と記してられるが、日記は續記されていて欠けてはいない。本稿に引用した日記の一六一八年一月二十六日の条は正に本書翰と関連するものである。
- (9) 『東洋学報』第二十三卷第三号。三八八—九一頁。
- (10) Cocks. *Diary*. op. cit. Vol. II. p. 412.
- (11) *ibid.* Vol. III, p. 117.
- (12) *ibid.* Vol. III, p. 151.
- (13) *ibid.* Vol. III, Appendix. 6, p. 286 [O.C., No. 841]
- (14) *ibid.* Vol. III, pp. 49-50.
- (15) *ibid.* Vol. I, p. 202, Vol. II, pp. 32, 144, 145, 264.
- (16) *ibid.* Vol. III, p. 66.
- (17) *ibid.* Vol. III, pp. 144-151.
- (18) 註(17)参照。
- (19) *ibid.* Vol. III, pp. 192-194, 194-195, 198-199, 199-200, 201.
- (20) Letter from Richard Cocks at Hirado to Sir Thomas Smyth in London, 7 Sept. & 14 Nov. 1622. [O.C., No. 1078]
- (21) 『東洋学報』第二十三卷三三二号。八支那甲必丹李旦の死亡。四一八—四二四頁。
- (22) 谷応泰、『明史紀事本末』卷七十六。劉猷廷、『広陽雜記』卷四。徐鼐、『小腆紀伝』卷六十三。鄭芝竜。吳偉業、『鹿樵紀聞』卷中。鄭成功之乱。江日昇、『台湾外記』卷一。
- (23) 『明熹宗実録』卷八十七。天啓七年八月癸丑。『明毅宗実録』卷四百九十八。崇禎元年夏四月己巳。六月丁未。九月辛未。崇禎二年春正月丙午。卷百九十九。崇禎八年夏四月丁亥。沈国元、『兩朝從信録』卷三十四。

- (24) 『東洋年報』第二十三卷二二号。九郎才助の拾頭と李  
可遺族との葛藤。四三二—四三三頁。
- (25) Copie van de naer Tayouan afgesondene  
Chineesche Missiven ontfangen van 24 July—1 Oct.  
1633 (Kol. Archief, 1025). Missive van Augustin aen  
den Hr. Gouverneur Putmans. Ontfangen 14<sup>en</sup> Septem-  
ber 1633 geaenckert inde Bay Tamsoa.
- (26) Copie van verscheydene afgesondene missiven  
aen de Chineesen van 27 July—19 Sept. 1623. (Kol.  
Archief, 1025) Missive aen Augustin, Zoon van den  
ouden Cap<sup>n</sup>. China. door Hans Putmans. Actum Catwi-  
jck desen 17 September anno 1633.
- (27) 永積洋十『平戸オランダ商館の日記』第三輯、一八  
頁。
- (28) 同右第三輯、五二頁。
- (29) 谷忠泰『明史紀事本末』卷七十六。鄭芝龍。 *Diction-  
ary of Ming Biography, 1368-1644*. 1976. Vol. 1, pp.  
947-948.
- (30) Dagh-Register gehouden int Casteel Batavia vant  
passerende ter plaetse als over geheel Nederlandtse  
India. Anno 1631-1634's. Gravenhage & Batavia, 1898.  
Nov. 24, 1632.

明末日本僑寓シナ貿易商アウグスチンの活動 岩生

- (31) *ibid.* Feb. 7, 1633.
- (32) 永積、第三輯、一六三頁。
- (33) 董應挙、『崇相集』。崇禎己卯刊。第五冊。
- (34) 『皇明經世文編』、卷四百八。徐中丞奏疏。
- (35) 永積、第三輯、二六六頁。
- (36) 永積、第四輯、三〇二頁。

### 跋語

以上明末日本平戸に僑寓して活動した李旦の一子一官アウグスチン李国助の活動について紹介し、彼の晩年の活動については、極めてユニークな記事を述べた董應挙の筆に成る「籌海刺言序」なる序文を利用して闡明に努めたが、この序を載せた「籌海刺言」なる書、そのものの中には、必ずや更に詳しい興味ある重要な記事が盛り込まれているに相違ないと思われる。そこで年来、このまぼろしの書の存否を、手を盡して追求して来たが、未だに見て貰えないのは残念である。博雅の示教を頂けるなら誠に幸甚である。

尚この研究を進めるに当り、曾てロンドン市のブリチッシュ図書館のインド庁文庫 India Office Library のアンソニー・ファリントン Anthony Farrington、台湾大学図書館司書官曹永和両氏、インド庁文庫やオランダ国へ

ヘーグ市国立中央文書館 Het Algemeen Rijks Archief並びに我が国立公文書館の内閣文庫など、各所の係員各位が、筆者の図書や文書の閲覧に当り、与えられた温い理解と援助に対し深甚の謝意を表すると共に、本稿執筆中筆者の疑義に対して示教された東洋文庫内ユネスコ東アジア文化研究センターの生田滋君の好意とをここに銘記して深謝の意を表するものである。

本稿中に引用した未刊の欧文史料の末に、それぞれ O.C. と記したのは、前記インド序文庫所蔵の「原書信」Original Correspondence の帙中の文書番号の略号であり、Kol. Archief と記したのは、前記ヘーグ市国立中央文書館所蔵の植民地文書 Koloniaal Archief の帙中の文書番号の略号である。(昭和五十九年八月八日稿了)